

創世記5章「アダムの系図」

1A 死という現実 1-5

2A 短くなる寿命 6-17

3A 死を見ない者 18-24

4A 呪われた地の慰め 25-32

アウトライン

私たちは創世記 5 章に入ります。ここは、「アダムの歴史の記録」とあり、アダムからノアにまで至る系図が書かれています。ここで思い出さなければいけないのは、4 章です。4 章にも実は、系図がありました。カインからレメクという名の人までの系図です。カインが弟アベルを殺しました。そして、その殺人を悔い改めることもなく、さすらい、そして町を建てたという話から始まりました。そして、その子孫は文明を築きました。けれども、カインが殺人を犯した暴虐性を、レメクはさらに増幅させて、暴虐に満ちた世界になっていることを示しています(4:23-24)。そして6章において、ノアの時代の暴虐の時代へと続くのです。神がこの世界を洪水で裁かれる時に、その理由は「地は、神の前に墮落し、地は、暴虐で満ちていた。(11 節)」とある通りです。

その中で神は救いの恵みを与られます。アダムとエバに、アベル亡き後、セツを生まれさせたのです。そして、セツの子孫が主の御名によって祈り始めたという記録が 4 章最後にあります。その、「主の御名によって祈り始めた」という人々の代表者が、5 章に書かれています。ここには、私たち、イエスの御名によって祈る者たちに大きな恵みと特権が書かれています。それは、私たちは、暴虐で道を外している世界の中に生きていても、イエスの御名によって平和と安息を造っていく者たちなのだ、ということです。

1A 死という現実 1-5

5:1 これは、アダムの歴史の記録である。神はアダムを創造されたとき、神に似せて彼を造られ、
5:2 男と女とに彼らを創造された。彼らが創造された日に、神は彼らを祝福して、その名をアダムと呼ばれた。
5:3 アダムは、百三十年生きて、彼に似た、彼のかたちどおりの子を生んだ。彼はその子をセツと名づけた。
5:4 アダムはセツを生んで後、八百年生き、息子、娘たちを生んだ。
5:5 アダムは全部で九百三十年生きた。こうして彼は死んだ。

私たちは、この文章からいくつかの真理を読み取ることができます。一つは、「神に似せて人は造られた」ということです。この根本真理を心の奥底に焼きつけましょう。全ての人は神に造られたがゆえに、愛されています。尊い存在です。誰一人、無駄な人はいません。そしてこれは、非常に高い基準を示しているのです。キリスト者に対しては、神は、「愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。(エペソ 5:1)」と命じられています。神は、天から太陽の光線を、良い人にも悪

い人にも与えておられる恵みを持っています。同じように、すべての人を愛するようにしなさいという命令です。

そしてもう一つは、「男と女とに彼らを創造された。」とあります。その後で、「神は彼らを祝福して、その名をアダムと呼ばれた。」とありますね。女もアダムと呼ばれているのか？と思われるでしょう。そうです、「アダム」というのを英訳では「人類」と訳しています。女も男と平等に、人として造られていることをここで明らかに示しています。ガラテヤ書には、「男も女も、キリストにあって一つ」という言葉があります。性によって、私たちは深い所で差別を行なっています。しかし、霊的には全く同じところに立っており、かつ天においては、男も女もなくなり、御使いのようになります。

そしてさらに、「彼に似た、彼のかたちどおりの子を生んだ。」とあります。アダムは神に似せて造られたけれども、セツそれ以降の子孫は、アダムに似せて造られました。ここに、「罪の受け渡し」があるのです。DNA のようにして、罪の性質がアダムの罪によって受け継がれていきます。したがって、私たちは母の胎に宿った時から罪の性質をもっており、罪人として生まれてきたということです。そこで、「彼は死んだ」という言葉が重みを持ちます。確かに、彼は長生きをしましたが、それでも死んだのです。人は元々、死ぬようには造られていなかった、永遠に神と共に生きるように造られました。それが許されなくなったのです。「ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、..それというのも全人類が罪を犯したからです。(ローマ 5:12)」

この暗い影を残して旧約聖書の歴史は進みます。系図は、所々に出てきます。そして最後は、マタイによる福音書1章と、ルカによる福音書3章、すなわちイエス・キリストの系図で終わるのです。そしてこのアダムの系図は延々と旧約聖書の中で続き、新約聖書の最初のマタイによる福音書で終わります。「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」です。イエス様は、「私はいのちであり、よみがえりです。わたしを信じる者は、死んでも生きています。」と言われたように、罪をご自身の十字架によって取り除き、よみがえられ、それで永遠の命を与えられます。この恵みが、キリストの系図によって恵みと命が入ってきました。

アダムが千年近く生き、その他の子孫も長寿を全うしています。しかし千年を越えることはありません。私たちはここに、世界の終末も思わなければいけません。アダムがエデンの園を出てから、千年以上生きることはなかったのです。ここに、千年王国の意味があります。黙示録 20 章、キリストの再臨後に、千年間、キリスト者と患難時代の聖徒たちがキリストと共に地上を統治することが、書かれています。なぜ千年なのか？アダムによって失ってしまった、その期間の回復です。そして天地万物が崩れ落ち、新天新地に入り、永遠の都エルサレムで神と小羊キリストと共に住むことになります。

2A 短くなる寿命 6-17

5:6 セツは百五年生きて、エノシュを生んだ。5:7 セツはエノシュを生んで後、八百七年生き、息子、娘たちを生んだ。5:8 セツの一生は九百十二年であった。こうして彼は死んだ。5:9 エノシュは九十年生きて、ケナンを生んだ。5:10 エノシュはケナンを生んで後、八百十五年生き、息子、娘たちを生んだ。5:11 エノシュの一生は九百五年であった。こうして彼は死んだ。5:12 ケナンは七十年生きて、マハラルエルを生んだ。5:13 ケナンはマハラルエルを生んで後、八百四十年生き、息子、娘たちを生んだ。5:14 ケナンの一生は九百十年であった。こうして彼は死んだ。5:15 マハラルエルは六十五年生きて、エレデを生んだ。5:16 マハラルエルはエレデを生んで後、八百三十年生き、息子、娘たちを生んだ。5:17 マハラルエルの一生は八百九十五年であった。こうして彼は死んだ。

まずここでは、名前の意味をご紹介します。「セツ」は「基礎」という意味。霊的な基礎を築いた人、ということでしょうか。エノシュは、「壊れやすい」という意味。人間の弱さを話しています。確かにエノシュにおいて、寿命が百年ぐらい短くなっています。そして、ケナンは「鍛冶屋」です。これは興味深いので、4章22節、カインの系図において、トバル・カインが青銅や鉄の鍛冶屋であったとあるからです。つまり、ケナンはそのような世界の中で鍛冶屋としての職業を持っていた、ということになります。4章と5章は同時期に、同居していたことを思い出してください。別々の世界ではなく、地理的、物理的には同じところにいたのです。これは、私たちが生きている世界でも同じです。肉の子孫に属しているのか、霊の子孫に属しているのか、同じ職業を持っていても全く意味が異なります。

それから、「マハラルエル」は「神をたたえる」という意味です。主への賛美がこの時代に彼らの間で回復したのでしょう。ところで、この系図を見て全てとは思わないでください。息子たち、娘たちが生まれており、数多くの子孫たちがこの系図以外にもいます。聖書はあくまでも、明確な意図をもって、取捨選択をして名前を残しているだけです。そして「エレデ」は「守る、防御する」という意味です。

ここで重要なのは、エノシュの名のように、人の寿命のはかなさを示していることです。徐々に短くなっています。そしてノアの洪水後は最終的に、七十歳、八十歳の寿命に落ち着きます。詩篇90篇においてモーセが、そのことを歌いましたね、読んでみましょう。「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。だれが御怒りの力を知っているでしょう。だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。その恐れにふさわしく。それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。(10-12節)」このような制約された人生の中で、なおも御子にある永遠の命を保ち、そして体のよみがえりを信じて生きるのが私たちです。

3A 死を見ない者 18-24

5:18 エレデは百六十二年生きて、エノクを生んだ。5:19 エレデはエノクを生んで後、八百年生き、息子、娘たちを生んだ。5:20 エレデの一生は九百六十二年であった。こうして彼は死んだ。5:21 エノクは六十五年生きて、メシェラを生んだ。5:22 エノクはメシェラを生んで後、三百年、神とともに歩んだ。そして、息子、娘たちを生んだ。5:23 エノクの一生は三百六十五年であった。5:24 エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。

エノクは死にませんでした。生きていた時に神が彼を引き取られました。彼は、「神とともに歩んだ」とあります。神を信じて、神を生活の中にお迎えしながら生きていた、ということです。その変わりの中で、神が、彼がまだ死んでいないのに天に引き上げてくださったのです。

エノクという名前の意味は、「奉獻」です。彼は神に自分自身を捧げた人でした。興味深いことに、カインの息子が同名でした(4:17)。そこでカインは町を建てていますが、いわば町を奉獻するというような意味合いが込められていたのでしょうか。この世に捧げる、あるいは神に捧げる、同じ名前でもそのどちらかに我が身を捧げているのかが問われます。

そして、エノクが神と共に歩み始めた時期を確かめると、「メシェラを生んで後」ということです。彼の名前の意味は、「彼が死ぬとそれは送られてくる」という意味です。これは、来るべき裁きです。神から裁きが来ることを彼は前もって知ったのでした。その危機感から、主と共に歩む生活を始めたのでしょう。神と共に歩むことは、信仰によって歩むことであり(2コリント 5:7)、そして、光の中、清さの中に歩むことであり(1ヨハネ 1:5-7)、そして神に言われることに同意して歩むことです(アモス 3:3)。ヘブル人への手紙 11 章に、エノクが信仰によって神を喜ばせていたと書いてあります。「信仰によって、エノクは死を見ることのないように移されました。神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていました。(ヘブル 11:5)」

彼は生きていた時に、預言活動を行っていたようです。ユダの手紙にこう書いています。「アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう言っています。『見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。すべての者にさばきを行ない、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。』(14,15 節)」終わりの日に主が戻ってこられることを、まだ私たちにとっても先のことをその時にすでに預言していました。

けれども、私たちキリスト者も彼と同じように、この聖書によってはるか先のことまではっきりと預言することができます。そしてエノクは、洪水の裁きが来る前に天に引き取られましたが、同じようにキリスト者が生きたままで主に引き取られる約束が、テサロニケ人への手紙第一4章に書かれています。「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私た

ちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。(16-17 節)」

そして、この言葉の後にパウロは、主の日、神の裁きの日のことを告げています。つまり、エノクと同じように、私たちが神と共に歩むことによって、この裁きの日が近いことを知って、それで神に引き上げられるということです。ノアの洪水がエノクの引き上げの後に起こったように、地上に下る患難も、教会の引き上げの後に起こります。

4A 呪われた地の慰め 25-32

5:25 メシェラは百八十七年生きて、レメクを生んだ。5:26 メシェラはレメクを生んで後、七百八十二年生き、息子、娘たちを生んだ。5:27 メシェラの一生は九百六十九年であった。こうして彼は死んだ。

メシェラは、この系図の中で最も長く生きた人です。彼の名前が先ほど申し上げたように、「彼が死ぬ時に、それが来る」というものです。彼の年齢を計算すると、ちょうど洪水の来る直前で死んだことが分かります。7 章 11 節に、「**ノアの生涯の六百年目の第二の月の十七日、その日に、巨大な大いなる水の源が、ことごとく張り裂け、天の水門が開かれた。**」とありますが、計算すると、ノアが 600 歳の時に彼が死にました。

このことから私たちは、神の恵みの忍耐深さを思います。神は忍耐深く、人々が悔い改めるのを待っておられます。一人でも滅びることを望まれないからです。「2ペテロ 3:8-9しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」

5:28 レメクは百八十二年生きて、ひとりの男の子を生んだ。5:29 彼はその子をノアと名づけて言った。「主がこの地をのろわれたゆえに、私たちは働き、この手で苦勞しているが、この私たちに、この子は慰めを与えてくれるであろう。」5:30 レメクはノアを生んで後、五百九十五年生き、息子、娘たちを生んだ。5:31 レメクの一生は七百七十七年であった。こうして彼は死んだ。5:32 ノアが五百歳になったとき、ノアはセム、ハム、ヤペテを生んだ。

レメクは、「兵士、征服者」という意味ですが、これはカインの子孫、レメクと同じ名前です。カインの子孫のほうのレメクがその時代の有力者だったのでしょうか、それにちなんだ名となっていますが、彼はむしろ「安息」を求めています。それで、彼がノアを生んだ時に、「この子は慰めを与えてくれるだろう」と言っています。

この子がメシヤかもしれないと期待していたからです。「この地を呪われたゆえに、私たちは働き、この手で苦勞している」というのは、覚えていますか、神がアダムに対して与えられた呪いです。この呪いから解き放ち、慰めを与える方、つまりメシヤが来られたと思いました。エバがかつて、カインに期待をかけたのと同じです。もちろんノアはメシヤではありませんでした。けれども、確かにノアによって、新しい世界が始まり慰めを得ることはできました。そして「ノア」という名前の意味は、「休み」あるいは「慰め」です。

こうして、私たちは靈的な子孫の生き方を見ました。私たちが同じように、暴虐と悪に満ちているこの世界で、なおも主の御名によって祈り、神と共に歩む生活を歩んでいるかどうか？主を畏れかしこんで、来るべき裁きがあることを思いながらいきているか？もちろん、そんなことを起こってほしいと思わないし、神がそれを引き伸ばしてくださることを願います。しかし、主が来られることを厳かに宣べ伝え、それでもってキリストにある永遠の命を受け継ぐことを待ち望む者でありたいと思います。